

「どう考えたって悪戯いたづらだろ。真面目に相手をするなんて馬鹿馬鹿しいじゃないか」

しかし老いた父親は一向に懲りている様子がなかった。それどころか、「お前は何もわかってないなあ」と哀れむようにいうのだった。

何がわかってないのか、とむきになって詰問きつもんすると、雄治は涼しい顔をしてこういった。

「嫌がらせだろうが悪戯いたづら目的だろうが、『ナミヤ雑貨店』に手紙を入れる人間は、普通の悩み相談者と根本的には同じだ。心にどっか穴あなが開いていて、そこから大事なものが流れ出しとるんだ。その証拠に、そんな連中でも必ず回答を受け取りに来る。牛乳箱の中を覗きに来る。自分が書いた手紙に、ナミヤの爺じいさんがどんな回答を寄越よこすか、知りたくて仕方がないわけだ。考えてみな。例え出鱈目な相談事でも、三十も考えて書くのは大変なことだ。そんなしんどいことをしておいて、何の答えも欲しくないなんてことは絶対にない。だからわしは回答を書くんだ。一生懸命、考えて書く。人の心の声は、決して無視しちゃいかん。」

実際に雄治は、その同一人の手によるものと思われる三十通の悩み相談の一つ一つに真面目に回答を書き、朝までに牛乳箱に入れた。そして確かに店を開ける前の午前八時には、それらの全てが持ち去られていたのだった。その後、同種どうしゆの悪戯は起きていない。代わりにある夜、『ごめんなさい。ありがとうございました。』と一文だけ書かれた紙が放り込まれた。その筆跡は、三十通の主のものと酷似こくじしていた。それを誇らしげに息子に見せた時の父親の顔を、貴之は忘れられない。

多分生き甲斐<sup>が</sup>ってやつなんだろうと思った。約十年前、貴之の母親が心臓病でこの世を去った時には、雄治はすっかり元気を無くしてしまった。すでに子供たちは全員家を出ていた。一人きりの孤独な生活は、間も無く七十歳になろうという老人から生きる気力を奪い取るには、十分なほど辛いものだったようだ。

貴之には二歳上の、頼子<sup>よりこ</sup>という姉<sup>あね</sup>がいる。だが彼女は夫<sup>おつと</sup>の両親<sup>どうきよ</sup>と同居<sup>たよ</sup>しており、とても頼るわけにはいかなかった。雄治の面倒を見るとすれば、貴之しかない。とはいえ彼も世帯<sup>しやたい</sup>を持ったばかりの頃だった。当時は狭い社宅暮らしで、雄治を引き取る余裕などなかった。

そんな子供たちの実情をわかっていたのだろう。雄治は元気をなくしながらも、店を閉めるとは決して言わなかった。貴之も、そんな父のやせ我慢に甘えていた。

ところがある日、姉の頼子から意外な電話がかかってきた。

「びっくりしたわよ。すっかり元気になってるんだもの。お母さんが死ぬ前より生き生きしてるかもしれない。あれなら一安心<sup>ひと</sup>。当分は大丈夫だと思う。あなたも一度顔を見に行ってみたら？ 驚くわよ、きっと」

久しぶりに様子を見に行ったという姉は、声<sup>こゑ</sup>を弾<sup>はず</sup>ませていた。さらに彼女は興奮<sup>こうふん</sup>した口ぶりで、「どうしてお父<sup>とう</sup>さんがそんなに元気になったかわかる？」と訊いてきたのだ。貴之がわからないというと、「そりゃそうよねえ、わかるわけないと思う。私なんか、それを聞いて二度びっくり」と続けた後、ようやく事情を話してくれたのだ。お父<sup>とう</sup>さんは悩みの相談室<sup>さだんしつ</sup>まがいのことをしている、と